

松之一色

花伝書を見る

松の一色（松の一色真：初版）

桑原治郎兵衛（富春軒：初版）

松 苔

（立花時勢粧・下 秘曲の図）



桑原治郎兵衛

立花時勢粧「松一色」

この絵図は木版刷りに彩色されている。墨色だけの絵と比べてみると、苔生した枝や赤茶けた松葉の微妙な味わいが絶妙に彩色されているのがわかる。

想像だが、富春軒仙溪が絵を描き、彫り師、摺師すしによって木版刷りができた時点で、絵師もしくは富春軒本人によって念入りに彩色が施された

のだろう。

流祖の息吹を感じてもらいたくて、原寸大で掲載させていただいた。

3月に立花時勢粧333年・桑原専慶流いけばな展を予定している。タイトルは「花の芸術」。代々の家元が大切にしてきた「花を敬う心」で皆さんと共に花をいける日を楽しみにしている。

仙溪

花伝書を見る

立花 檜除真

「松の前置」富春軒

檜 晒木 沢水木 水仙

松 苔 枇杷 檉木

(立花時勢粧・下 秘曲の図)



立花時勢粧「松の前置」

水際の松と中央の晒木
がつくる深山幽谷の景色。
水仙は仙人のようである。
檜の曲線と沢水木の直線
が絶妙。苔生した小枝が
効いている。

仙溪

富春軒

櫻之一色

花伝書を見る

立花 桜の一色

(初版では富春軒)

桜 苔木 万年青 羊歯

(立花時勢粧・下 秘曲の図)



立花時勢粧「桜の一色」

まるで1本の桜の大樹である。桜花の間に若葉が覗いている。山桜である。

桜は諸花の頭であり、桜を尊美す心をもって立てるためには、花の咲くことのない草木をあしらうだけに用いるようにし、あくまでも桜が主役となるような配慮をもとめている。

桜には晒木は使わず苔木を添えていることも自然を手本にした表れである。自然の美しさを敬う心を強く感じる。

桜一色は3図あり、この絵が最初に登場する。初版では作者は「富春軒」で題は「桜一色真」となっている。

後刷本では作者名と「真」が削られている。

立花時勢粧333年「花の芸術」展では桜一色に挑む予定だ。すでに本桜という品種の大枝を切って開花調整してくれている。私にとつて初めて桜一色を楽しみにしている。

仙溪

花伝書を見る

立花 藤除真

「藤の心」一歩子 (富春軒・初版)

藤 松 檉 躑躅 柘植

小菊 鳶尾 若葉

(立花時勢粧・下 秘曲の図)



立花時勢粧「藤の真」

S時に上へ伸びる藤蔓を真にした立花。「秘曲の図」の一つで、元は富春軒の作である。若々しい蔓の姿に藤の命を感じる。2色の躑躅で明るく彩りを増している。

仙溪

一歩子

草花

花伝書を見る

立花 芦除真

「草花」僧光清（富春軒・初版）

あし 薄 百合 芍薬 杜若 小菊

熊笹 紫苑 著我

（立花時勢粧・下 秘曲の図）



草花主体の立花である。葉を広げ茎を伸ばし花を咲かせる草花たち。自然の息吹を見つめる眼差しを感じる。

花をいけるのは、和歌や俳句や詩に自然の輝きを詠みこむのに似

ている。肝心なのは輝きを感じる心。富春軒のいける花はどの花もキラキラ輝いている。

仙溪

僧光清

草花砂之物草

花伝書を見る

砂の物 檜扇除真

「草花砂之物草」

中野氏（富春軒・初版）

檜扇 芦 杜若 仙翁花 百合

擬宝珠 小菊 桔梗

（立花時勢粧・下 秘曲の図）

立花時勢粧の百十八ある絵図の一番最後、トリを飾る一作。見開きで掲載されているので、生き生きとした躍動感を感じ取ることができ

この絵図の主役は草花で、植物の澆刺とした生命力を表現しようとした富春軒仙溪の心が読みとれる。

右へ大きく弧を描きながら伸びる葉は何の葉だろう。ススキのようにも見えるが、葉の下にやはり長く伸びた茎の先にカキツバタの蕾が描かれていることからすると、この長い

葉もカキツバタの葉ではないだろうか。

池のほとりで雨風に倒れたカキツバタの花と葉が、思いのほか長く伸びていて、それをなんとか生かしたい一心でこの砂の物を立てたのだろう。厳しい環境にあらがう植物の姿を美しいと感じ、魅了されていたのだと思う。

「二瓶の内に一枝風流なれば、ほかこれにあらそいて働きあり。」と「砂の物草の花形」で述べている。

普通は上に伸びる葉が水面を飛び越えんばかりに横へ伸びる。その姿にヒオウギやユリが絶妙なバランスで配されている。左下に横倒しに育ったユリがガイッと上を向いている。よくこんな咲き方を見つけてきたものと感心する。砂鉢の裝飾までが渾然一体となっている。 仙溪



中野氏

荷葉一色

花伝書を見る

立花 荷葉(蓮) 一色

桑原次郎兵衛

蓮

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

28本の花・実・葉・巻葉が渾然一体となっている。この立花を立てた桑原次郎兵衛は初版において富春軒36作に次ぐ16作の絵図がある。富春軒が自然の面白みに寄り添う感じな

のに対して、次郎兵衛は自然の造形の組みあわせを楽しんでいる感じがする。自然体の富春軒と攻めの次郎兵衛。二人はどんな関係なのだろう。



桑原次郎兵衛

同花形之内流枝持立

花伝書を見る

立花 りつが 松除真 のまじん

行の花形 ぎよう 流枝持立 ながしもちたて

富春軒

松 苔 百合 仙翁花 せんわう

著我 しやが 木槿 むくげ 柘植 つげ 嫩葉 わかば

小羊齒 せうじ 桔梗 ききやう

(立花時勢粧・上)

目を引くのは低い出口から

立ち昇る真と長く横へ伸びる

流枝だが、真や流枝に添う百

合もかなり長く見せている。

ひよつとすると、百合を伸び

やかに見せたたくてこの花形が

生まれたのかもしれない。

全体を見ると頭をもたげた
龍のように見える。百合の花
は開かれた龍の手、器は龍が
守る玉。漲る生命力を感じる
不思議な立花である。



富春軒

同砂之物

花伝書を見る

菊一色 砂の物

専定寺 (富春軒・初版)

菊 小菊

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

「砂の物」にも真行草がある。二株立てで、男株と女株に軽重がないように立て、どちらにも正真と前置があるものを「行の砂の物」という。

この図「菊一色砂の物」は男株と女株の軽重が自由で、二株であっても正真一つ、前置一つなので「草の砂の物」である。

「株立は異曲風流に意気はづみを第一として立てるが、とりわけ草の砂の物では、一手珍しき作意がなければ叶わない。」と富春軒は書いている。

向かって左の株から真の菊が右側に除いて出ている。普通なら左に除いて出るところ

を逆にすることで意外性を生んでいる。「珍しき作意」である。

挿花の神髓を習得した上で、定石にこだわらない自由な精神が備わってこそ「一手珍しき作意」は生まれる。



専定寺

同

花伝書を見る

立花 りっか 梅擬除真 うめごのきしん
除心の内草の花形 のきしん うちくさ

富春軒

梅擬 うめご 枇杷 びわ 菊 きく 小菊 せうきく

熊笹 くまざさ 伊吹 いぶき 嫩葉 なは 檜木 ひのき

(立花時勢粧・上)

固定観念を払拭するかの
ように、ビワの葉3枚だけ

でさらりと胴をつくり、ウ
メドキの軽やかさに対応
させている。更にクマザサ
の茂みが呼応する。
花材の選択と工夫の妙味。



富春軒

直心立之内草之花形

花伝書を見る

立花 りつか けいとうすくし 鶏頭直真 すくしんたて

直心立の内草の花形

桑原正栄

(富春軒仙溪・初版)

鶏頭 柳 梅擬 菊

擬宝珠 檉木 檜扇

躑躅 伊吹

(立花時勢粧・上)

うに目のある所に目あり、鼻ある所に鼻があるように」との古人の言葉を用いている。

型の中でどれだ

け草木の個性を引

き出せるかが問わ

れる花形である。

松以外を真(心)にした直真立花は「直真立・草の花形」になる。「直真立草の花形」というのは、心に梅、海棠、梅擬、水木、檜、鶏頭などの直なるを用いる」と書かれている。

直真立ては法度を守り格式に背かず、草木きれいに素直なもの丈高く幽玄にさすことを本意とする。「人の顔のよ



同

花伝書を見る

立花 りっか 松除真 まつのおきしん

「南天の胴」

富春軒

松 若松 伊吹 晒木 南天

栢植 つげ 小柏 小菊 著栽 しよが

(立花時勢粧・下)

中段の南天を境に、上段と下段の景色が違う。上段の色が抑えられているので、赤い実が際立って見える。



上段右上へ立ち昇るのは松の若木だろうか。だとすれば、老松の間に伸びる若い松の初々しさが加わることで、南天の赤い実りが益々映えてくる。

富春軒

松竹梅

花伝書を見る

立花 りつか 松除真 まつりきしん

「松竹梅」

富春軒

老松 若松

竹 枯竹 熊笹

紅梅 白梅 苔梅

(立花時勢粧・下)

古来より祝言の花として松、竹、梅を真にした三瓶を並べ

ることがあり、また松竹梅を一瓶に立てることもされたが、他の草木をまじえず松竹梅だけで立てることは古人も指しもらした花形で、真の松竹梅と呼ぶべきか、と書いている。

松竹梅それぞれに老若の対比があり、変化のある竹と共に力強い生命を感じる。若松の真の勢いに、未来への願いが託されている。



富春軒

除心立之内真之花秋

花伝書を見る

立花 りつか 木蓮除真 もくれんのきしん

除真の内真の花形

富春軒

木蓮 もくれん 伊吹 いぶき 松 まつ 栢植 つげ

躑躅 つづじ 小菊 こぎく 檉木 かえぎ 枇杷 びわ

著我 しやが 要 かなめ

(立花時勢粧・上)

花形ばかりになってしまったと富春軒は嘆いている。

昔の名人はあえて扱い難い真(の枝)を探し、工夫をこらすことで色々な花形を生み出した。それらは除真のうちの花形と言ひ、花に自由を得て様々に景色を変え、人の

この立花図には「近ごろ出された花伝書に多く載る花形」で「これ私の作意にはあらず」と添えられている。

除真のうち真の花形は仏前対の花に必ず用いる花形なので出し所や寸法に定めがある。そのため人に立花を教える最初の花形となったが、それゆえに今では立花といえばこの

心を慰めたと書いている。

この木蓮の立花は充分に美しいが、立花の醍醐味はまだまだこの先にあるのだよと富春軒は伝えたかったのだろう。



富春軒

同砂之物

花伝書を見る

砂の物 桜二色

(富春軒・初版)

桜 万年青 伊吹 柘植

苔木 檜 羊歯

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

男株と女株のバランスに軽重がなく、どちらの株にも正真と前置があるので行の砂の物である。苔生した太い幹が両株の土台となって、躍動する桜の枝をしっかりと支えている。

絵は平面だが実際は立体である。それぞれの枝の出方を思い描いてみよう。

左側、男株の苔幹はかなり大きそうだ。三方に分かれた一本の幹が前方へ傾いて出ているのだろう。直上する幹は、前から後ろへ曲がり、やや後方で立ち昇る見越の役割、その左の幹はぐいっと前方へ力

強く出ているように見える。荒々しい男株の苔幹に対して女株では株の中心に真っ直ぐ立っている。静と動の対比が面白い。

太い苔幹から別れ出た苔枝はどんなふうに出ているのだろう。男株では前に出た太い幹から左やや前方へ。女株では直立した太い幹から右やや後方へ出ていると見た。

桜の枝の立体感も想像してみよう。男株で立ち昇る真は太い苔幹に添うように一度左前方へ出てから器の真上へ戻る丸みのある形。その左後方に副が、さらに左後方へ控枝が伸びる。正真の桜は株の中心に直立している。

女株の請は立派な横枝だ。最初は右後ろへ出てやがて真横へ伸びる感じか。低く右下に伸びた流枝は株の後方から横へ、途中から前へ、最後は真横へ。この後方の請と前方の流枝で風を抱きかかえるイメージだ。伊吹にも万年青の葉にも風を感じる。

立花時勢粧の絵図は、実際に立てられたものが描かれている。その場に自分が居て見ているところを想像してみよう。

季節毎に花会を催して絵にしたとあるが、3作の桜二色は同じ時に立てたものか。立てた時は蕾だったのか。どんな場所で立てたのか。多くの人が見ただろうか。



花伝書を見る

檜のきしん除真

富春軒

檜ひのきしやくやく

芍薬 松かなめ 要 小菊

晒木 (苔木)

(立花時勢粧・中 雑体の図)

ヒノキが主材ではあるが、シャクヤクも主役に見える。軽やかに昇る真と、左下から大きく跳ね上がる流枝、それらを繋ぐ胴のヒノキがシャクヤクのために舞台を作っているかのようだ。後方のマツが舞台の格を高め、中央でシャクヤクが舞を舞う。そんな想像をしていると、立花全体が一人の舞人にも見えてきた。神楽舞かぐらまいのイメージだ。格調高く舞う姿に神が宿る。



富春軒

花伝書を見る

二株砂物 太蘭真
富春軒

若による水辺の景色を見せる。
山に分け入り、太蘭の生える
神秘的な沼にたどり着いた、

太蘭ふとらん 芍薬しやくやく 松しょう 晒木せうぼく
杜若かまつばた 小菊せうきく 檜扇ひのうき 嫩葉わかば
(立花時勢粧・中 雑体の図)

富春軒が目指した「自由」
がここにも現れている。真つ
直ぐ育つ太蘭が曲がりつつ放
つ生命力に心打たれたのだら
う。数本の太蘭なのだが、松
の株や晒木と対等にいやそれ
以上の存在感がある。
それぞれの配置の絶妙なこ
と。松の切株や晒木を近景に
して、その向こうに太蘭と杜

そんな想像をしながら眺めて
いる。
砂の物は株立かぶぞとも呼ばれる
ように基本的に太い株が景色
に加わる。立花とはまた別の
表現ができるし、そこを目指
さねばならない。



富春軒

花伝書を見る

杜若一色 除真
桑原次郎兵衛

回

杜若 かきつばた 河骨 こうぼね
(立花時勢粧・下 秘曲の図)



手が逆さまに付いた不思議な形の器によって、水辺の花の妖艶さが増して見える。桑原次郎兵衛は才気溢れる技量の持ち主だと思う。この器も自分でデザインしたのではないだろうか。2色の花色に陰と陽が巧みに表現されている。

桑原次郎兵衛

同

花伝書を見る

荷葉(蓮)一色 (行:初版)

富春軒

蓮 芦 小菊

(立花時勢粧・下 秘曲の図)



蓮池の畔に昔ほどりや小菊が生え
 ている、そんな情景が目に浮
 かぶ。破れた蓮の葉が、芦の
 勢いを際立たせている。それ
 ぞれどの方向へ出ているのか。
 立体を想像していると時を忘
 れる。流祖の時代へのタイム
 トラベル。

富春軒

同砂之物

花伝書を見る

荷葉(蓮)一色 (砂の物・

初版)

寸松軒 (初版・富春軒)

蓮 蒲

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

横に広い口をもつ砂鉢に立てる「砂物」は、おのずと横広がりとなる。この蓮一色砂の物も、まるで目の前に蓮池が広がっているようだ。

男株と女株に軽重がなく、一株の砂物を左右に分け広げられたように立てられている。両株の正真、胴、前置の景色を変えることで、自然な景色の繋がりを見せている。

2つの株を1つに合わせた姿を想像してみたい。正真から前置にかけての景色に何の不自然さも感じない。

脇役的な存在だが、両株の間の後方に見える巻葉が、この砂の物の要のように感じる。



寸松軒

花伝書を見る

菊の一色（行：初版）

富春軒

菊 小菊

（立花時勢粧・下 秘曲の図）

がもともと備わっているから
だろう。風に倒れてもそこか
ら立ち上がる姿。土の中にしっ
かり根を張って風に立ち向か
う姿。そういうクセのある姿

を絶妙なバランスで各所に
配置し、しかも全体が自然
な味わいを損なわない。ど
の一色物も、命の輝きにあ
ふれている。

一色物には独特の雰囲気がある。過去に見た景色と重なる感じ。他の立花と比べて、より自然な印象を強く受ける。富春軒の一色物は正にそこに生えているようで、人の手を感じさせない。

そう感じるのは何故だろう。おそらくどの花にも強い個性



富春軒



花伝書を見る

紅葉一色 砂の物

(富春軒・初版)

楓かえでしやれぼ 晒木いぶき 伊吹つげ 柘植つげ

苔株こひな

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

画面の右下、屈曲しながら力強く晒木がのびる。おそろく伊吹(柏榎)が風雨に晒されたものだろう。厳しい環境を感じさせる。

その晒木の白さが楓の赤い葉を際立たせている。

さりげなく存在感を発しているのが苔生した株である。彩色の具合にもよるが、この絵図の場合は切り株というよりも、苔生した岩のようにも見え、とても瑞々しい。苔は楓を育てる水を蓄えているかのような。

乾いた晒木と、苔に覆われた株の対照が、色づく楓の命の美しさを強めている。



同砂之物

同

花伝書を見る

松一色 (行・初版)

富春軒

松 苔 松毬

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

この図だけ「富春軒」の名前が草書体になっているのは何故だろう。

富春軒が問いかけてくる。「君は自然と一体になれたかい?」

山深く人跡未踏の仙境を行者の如くに分け入ってはじめて出逢えるような景色とでも

言えばいいのだろうか。岩の隙間に根を張って風雨に堪える松の姿。どれも並の松ではない。様々な個性が混沌とした松一色にはある。



富春軒

水仙一色

花伝書を見る

水仙一色 (真・初版)

富春軒

水仙 金盞花 著我

(立花時勢粧・下 秘曲の図)



自由奔放な水仙の姿。これらは葉に針金を通して形作つたものではなく、すべて元々の姿であり、自然に曲がりくねった水仙を集め、役枝に配することで絶妙な花形を生み出している。

どの水仙も行儀の悪い扱いがたい姿をしているが、それ

は雪に倒れ風に翻弄されても葉を伸ばそうとする命の姿であり、富春軒はそういうものに自然本来の力と美を見いだしている。まさに

「花は野にあるように」挿している。

富春軒

花伝書を見る

柳除真立花「おもとまえおき万年青前置」

富春軒

枝垂柳 紅梅 白梅 柘植
万年青 檜 かなめ 要 しだ 羊齒 苔木

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

(解説は9頁へ)



富春軒

万年青の前置

△ 8頁の立花図▽

『立花時勢粧』の「万年青」の項目には次のように書かれている。

「老母草は前置ばかりに用いてほかにつかうことなし」

「花道第一の秘伝の物なり」

「おもとに指し合わせぬ物、草木の実のたぐい、広葉のたぐい、著我、水仙、熊笹」

「奇数につかうのは常のこと、偶数につかっても苦しからず」

「葉組しまりたるは幽玄ならず、ゆるやかなる時はくだけて勢いなし。緩からず、急ならず」

他にも、万年青の出生玄妙なところを見せられるようになるには、よほどの熟練が必要だと書いている。

さて、この絵を見ると、枝垂れ柳も柘植も紅梅も、とても動きがあり、斜めに吹き下ろす強い風を感じるが、それとは対照的に万年青はどっしりと構えている感じがする。もともと海岸部の山地に自生し、過酷な環境に適応してきたことを思うと、万年青には何事にも動じない、

母親のような強さがある。老母草の名前も頷ける。赤い実に優しい愛情を感じる。

『立花時勢粧』118作の内3作に万年青が使われている。この枝垂れ柳と紅白の梅の他に、あと2作。そのどちらもが「桜一色」だ。

春の兆しを香りで告げてくれる梅。春の息吹を象徴する桜。それらを足元で見守る万年青。そんな自然界のドラマを想像しながら絵図を見ると、流祖・富春軒に少し近づけたような気持ちになる。おそらく流祖自身も木や花の気持ちになつて立花を立て、自ら創つた世界を木や花の心で味わっていたのだろう。まさに仙人の境地といえる。



「桜一色」の万年青の前置

同砂之物

花伝書を見る

松一色 砂の物

(富春軒・初版)

松 晒木 苔木

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

『立花秘傳抄』(立華時勢粧4巻8巻)には、松一色について次のように書かれている。

「松の一色は祝言第一の花であり、また一色の一つである。移徙(貴人の引越し)の時には必ずこの花を指す。近頃初心の人にも相伝して、むやみやたらにこれを指すが、恐ろしいことだ。たとえ少々伝授したとしても、長年の巧者でなければ松の景気の妙なる所(なんともいえない美しさ)を瓶上にうつす(移す、映す)ことは難しい。たと

えば筆道をよく相伝したとしても、修行に磨きをかけなければ文字の形は良くならないのと同じである。」

「松の一色は四季それぞれに立てると言うが、菊がようやく終わる頃から紅梅がやや咲く頃までこそ、松の一色が一番面白い時季である。へ神無月時雨にそめぬ松」とは言うけれど、その一方で葉も黄ばみ霜にいたみ雪にうづもれて、色が変わった葉が出るのは、山も頭になり峰もさびしくなる頃のことだ。それなのに、この頃の人は春の末から秋のなかばまで変わらぬ色の松ばかりを瓶に集めて一色とする。そのどこに面白みがあるのだろうか。松は彩りが第一で難しいものだと言人も伝えている。」

「松に苔、晒木を付ける時は、体用よく和合して一木の気色(様子、表情、風情、趣)をうつすべきで、このことは立花の最も大切なことである。晒木は高山の物だから、松の気色も年月を経て枝が垂れ、陰高き心を指すべきである。若松、みどり松には加減が必要。」

長い文章の引用となったが、要するに、立花においては

自然の風趣をうつす

ことこそ大切なのだと言っている。おそらく富春軒自身が奥山に分け入り、松のなんともいえない美しさに魅了された経験の元にしての言葉だろう。

長い年月を経た松が、月明かりに陰高くそびえている。その姿のなんと神々しいこと。目をこらすと霜枯れた葉色や、白く光る晒木も混じる。その荘厳な美しさを瓶上にうつしたいと願う、強い思いが感じられる。

さて、この松一色・二株砂の物だが、「陰高き松」が見せる様々な要素を、目の前に低くギュッと凝縮させた感じがする。このような景色は実際には無いだろう。富春軒の心の中で創られた空想の世界、仙境の風景とでも呼ばばいいだろうか。独自の境地を感じずには居られない。

自然の「妙なる所」を自分なりに表現することを教えてくれている。

体用＝本体とそのはたらし。主体とその作用・属性。基本的な芸とそこから生まれる趣。



花伝書を見る

松除真立花

「除真の内草の花形」

富春軒

松 梅 晒木 苔木

水仙 椿 柘植 伊吹

枇杷 若葉

(立花時勢粧・上)

解説は9ページ



富春軒

除真の内 草の花形

「除真の内、草の花形」こそ立花の骨髄であると言ふ富春軒は書いています。

それがどのようなものかを、「立花時勢粧上巻」に11作の立花図で示してくれている。右の絵はそのうちのひとつだ。そして次のように書いている。

「草木自然の形をそのままに」

「あまり細工に頼らず」

「長短高下の定法を離れて六つの枝（真・見越・副・請・控枝・流枝）が、有ると思えば無く、無いかと思えば忽然と有つて」

「意気あり発生あり艶あり色あるを、草の花形という」

「名人の花というのは、十回、二十回、立花を立てたとしても、その都度珍しい一手が必ずあるものだ」

「名人の教えを受け、道を極めなければ、この妙を得ることは難しい」

さて、この「妙を得る」とは何をさすのだろうか。辞書で調べると「妙」とは、

言うに言われぬほど優れているさま。

不思議なまでに優れているさま。

ま。人知をこえて靈妙であるさま。

ま。「さま」を「こと」に換えてもよい）

という意味がある。また「靈妙」とは、

神秘的な尊さをそなえていること。

富春軒は

「自然の神秘的な尊さ」

を感じる立花を目指していた。それは、

「意気あり発生あり艶あり色ある」

そんな立花でありながら、珍しい一手がある、というものだ。

そのことを踏まえてこの絵を見てみよう。不思議な曲がり方をした松が左下へ伸びているが、それ以外は「草木自然をそのまま」立てた感じがする。

この曲がった松は途中で細

工がしてあるかもしれないが、枝先の急角度に曲がった姿は元の形だと思ふ。過去に自分でもこんな松をいけたことがある。

自然の様々な枝葉の組み合わせや差し出し方を工夫して、意気、発生、艶、色を感じる立花を立てている。そして最小限の細工による珍しい一手を加えて、自然の神秘的な尊さを表現している。

富春軒は次のようにも言ってくれている。

「近頃の人、この花形をものにしたいと願つても、従来の手癖が抜けず、あるいは基本花形に縛られて、いつも同じ花形になつてしまふ。例えば鑄型で瓶を鑄る時に、出来不出来はあつても、形は変わらないのと似ている」

「道」には真行草があり、真から行、行から草へと進むことが「靈妙」を得る手がかりとなるのだろう。

言うは易し行は難したが、高みを目指す気持ちは持つていたい。

花伝書を見る

立花 桜の一色

(富春軒・初版)

桜 枝垂れ桜 伊吹 柘植

苔木 檉 羊歯

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

よく見るといろいろな桜が使われている。一重咲き、八重咲き、若葉が赤いものと緑のもの、枝垂れ枝。流祖の時代はどんな桜が多かったのだろう。

和歌で「花」といえば桜を指すように、日本人にとって桜は特別な存在だが、その種類は変種を含めると自生種だけで百種以上、さらに園芸種は二百以上もある。

それらの基となる基本野生種(日本の桜の原種)は11種で、

山桜：花と葉が同時に展開する。古くから歌に詠まれ絵に描かれた。
大山桜：寒さに強く、北海道に多い。

霞桜：山桜よりやや小さな花が遅く咲く。

大島桜：伊豆諸島、伊豆半島南部に自生。葉の塩漬けが桜餅に。



江戸彼岸：早咲き、長寿で巨木、名木が多い。シダレザクラはこの系統。

丁字桜：花弁が小さく萼筒が長い。

豆桜：小さな花。富士、伊豆、房総に多い。

高嶺桜：標高の高い所に咲く。

深山桜：白花が複数集まる総状花序。
寒緋桜：沖縄で1月下旬に開花する。花は濃紅色。

熊野桜：2018年に原種の一つに加わった。紀伊半島南部に自生。早咲き。

となつている。これらが自然に交配し、変異し、あるいは人が関わって多くの品種が生まれ、今に至っている。現在では桜といえはソメイヨシノ(染井吉野)を思い浮かべる人が多いけれど、

ど、この桜は江戸時代終わりから明治時代にかけて、東京駒込染井村の植木屋がつくった園芸種で、奈良・吉野山の山桜に匹敵するような名花になれとの願いを込めて名付けられた桜だ。葉に先立って花が満開になる美

しさは、いかにも江戸っ子らしい粋な咲きっぷりだが、立花時勢粧の時代にソメイヨシノはまだ世に出てきていない。

立花時勢粧の桜は野生種の代表ヤマザクラだろう。桜を立てる時は「尊美する心」をもって、花の咲くことの無い草木をあしらっただけに用いるべきと書かれている。そうして立てられたのがこの桜一色だ。
桜への特別な思いがこめられている。

右同

花伝書を見る

立花 松除真

〔(行の) 行の花の内中流枝立〕

寺田八郎兵衛

松 枇杷 百合 紫陽花

栢植 要 小菊 檜扇(葉)

(立花時勢粧・上)



流麗な枝の動きが印象に残る。左に下がる真の松と右に上る請の枇杷の対比に、左に出た副の枇杷の大きな葉が絶妙なバランスに納まる。流枝が請のすぐ下から出ることで、花形の軽妙さを際立たせている。紫陽花の胴も爽やかだ。

立花時勢粧・上巻には真行草の花形と、それぞれにまた真行草があつてその作例が載る。富春軒が選抜したのであろう秀作が揃っている。

寺田八郎兵衛

同行之花形之内 左流枝

筑摩九郎右衛門

花伝書を見る

立花 松除真のまこと

「(行の) 行の花形の内
左流枝」

筑摩九郎右衛門

松 柏か 杜若かき 百合 柘植つげ

要 枇杷びわ 都忘れ

檜扇ひおうぎ (葉)

(立花時勢粧・上)

漲みる躍動感。この絵図を眺め

ていて、ダンサーが跳躍した瞬間の姿が思い浮かんだ。上体を反らせ、足を前後にピンと伸ば

して大きく前方へ跳んでい

る。立花には整った美しさをもつものもあれば、バランスを崩した不思議な魅力を放つものもある。後者の美

しさは臨機応変な補助枝の配置によって生まれることをこの絵図は教えてくれる。



同行之花秋

花伝書を見る

一株砂物 棕欄真

「砂の物の内行の花形」

西村松庵

棕欄 百合 晒木 松

嫩葉 杜若 羊齒 柘植

檜扇 苔木

(立花時勢粧・上)

シュロの幼木を真に立て、シュロの古木の太い幹を株立にした砂の物。シュロは中国から平安時代に九州へ渡ってきた外来種だが、南国の風情が好まれたのと、様々に利用できるの各地に植えられた。また実を食べた鳥が種を運んで山間に育っているところも多い。

幹を包む繊維層はシュロ皮と呼ばれ、縄や箒、束子になり、太い真つ直ぐな幹は梵鐘を撞くのに使われる鐘つき棒、撞木となる。程良い柔軟性があつて釣鐘を傷めないそう。切り出した後の切り株の横で、百合が咲く景色も実際にありそう。

「砂の物」は「株立」とも呼ばれ、口の広い鉢に砂を敷き詰めたところに、太く、低く、広く、薄く立てるものをいう。「景気するどに花形勢力風流なる様に立つべき」と書かれている。砂の物には自然の妙味を感じる景色がもとめられる。どんな幹や木をどのように集め、そこにどんな花を品良く添わせるかが見せどころだ。



西村松庵

同行之花之内 中流枝立

花伝書を見る

立花 かんぞうのきし
萱草除真

「除真行の花の内
中流枝立て」

寺田清左衛門

萱草の花と葉 松 桔梗

榎木 苔木 小菊

紫苑の葉 著我の葉 要

(立花時勢粧・上)

カンゾウが高く伸びて咲く姿
を立花に上手く生かしている。
右下の波打つ葉もカンゾウだろ
う。ただし花に鹿の子模様のあ

る品種は現在見あたらない。交配によつて偶然咲いたものだろうか。希少な花と思つて見ていると、松の枝から鳳凰が飛び立つ姿に見えてきた。カンゾウの花が頭、葉が尾羽で、シオンの葉が翼、キキョウは翻る羽のようだ。

この立花を立てた人は植物を単なる素材としてではなく、それぞれに息づく個性をもった生命体としてとらえている。そういう姿勢に学びたい。



寺田清左衛門

菊之一色

花伝書を見る

立花 菊一色

「菊の一色（真・初版）」

桑原次郎兵衛

菊 小菊

（立花時勢粧・下 秘曲の図）



桑原次郎兵衛

△ 8頁の立花図▽

ひよろりと立ち昇る真を頂点にして、徐々に個性を色濃くしながら四方へ広がる菊たち。個々のリズムが美しく纏め上げられている。

「秘曲の図」は40図あり、うち富春軒24図、次郎兵衛9図で殆どがこの2人の作である。

同行之花形 内副立

花伝書を見る

立花 松除真

「除真行の花形内副立」

中野小左衛門

松 菊 小菊 梅擬

粗檜 嫩葉 沢枯梗

(立花時勢粧・上)

門人の名があるが富春軒を強く感じる。一度下がった真の幹に対して、副も請も上る姿で対応。右に下がる梅擬と晒木は控枝だろう。自由な発想と絶妙なバランス感覚。



中野小左衛門

同

花伝書を見る

立花 すすきのきしん
薄除真

「除真行の花形の内左流枝」
むだりながし

林昌

薄菊 すすき 松 うめもどき
梅擬

熊笹 くまざさ 栢植 かたぎ
堅木

小菊 こぎく 夏櫨 なつはせ
著我 しやが

(立花時勢粧・上)



ススキを大きく真にし
て、山の木々で下方の景
色を作っている。

山頂で風に波打つスス
キの群生をイメージして
立てたものか。

「山頭有草体」という立
て方がある。実際に山で
見た景色を元に立ててい
るのだと思う。

林昌

立花時勢中雜物之圖



富春軒

(解説は5頁下)

花伝書を見る

△6頁の図▽

立花 うめもどきのきしん
梅擬除真

富春軒

梅擬 うめもどきのき 松 つげ 栢植 しやれぼく 椿 びわ 晒木
菊2種 くきく 小菊 こくきく 熊笹 くまざさ 枇杷 びわ

(立花時勢粧・中)

菊薫る秋の立花。

「立花時勢粧・中・雑体の図」の最初を飾る富春軒の立花。

真と請の枝垂れたウメモドキによって花形の中に目に見えない球体を感じる。

左下水際から出た枯れ枝が、控枝の松と前後で重なり輪のように見えているが、この枯れ枝が花形の丸みを完成させているように思う。

花形に大小の円があり器の手も円形なので、見ているとしみじみとした「和」を感じる。

自然が生んだ造形の調和。

花と器の調和。

空間と立花の調和。

それらの「和」が立花の醍醐味なのだ。